

今回は、その成因の面や、臨床経過の面やや特殊な問題を提供している症例について触れた。

22. 多彩な視床下部症状を呈した尿崩症の1例

(内科)

○水庭 操・山本みゆき・竹居真知子

症例は34才の独身男子。家族歴は特記事項なし。既往歴：昭和33年と38年に後頭部外傷，同43年に交通事故による鞭打ち症。同44年に急性腎炎。

現症：同47年9月16日，腸閉塞の疑いで茅ヶ崎病院に入院中，9月下旬より徐々に口渇，多飲多尿となり，同じ頃から眩暈，食欲不振，発汗異常あり，やや遅れて Impotenz，頭痛，耳鳴りなど出現。同11月月頃に求心性視野狭窄，同12月に微熱，翌48年1月に皮膚・毛髪の脱色に気付いた。更にその後，脱力感，無気力 霧視などが出現した。この間1日尿量は5～7 lで，経口利尿剤は無効であり，約10kgの体重減少をみた。

昭和48年4月2日，精査のため当科に転入院す。毛髪・腋毛・恥毛が赤く，皮膚は白い。両肺にラ音聴取，右季肋部に圧痛あり。なお5月頃より身体各所に白斑を生じてきた。腱反射は亢進し，病的反射なし，Parinaud signなし。尿量は1日5～6 l，比重1,005～6，体温朝36.8℃，午後37.3～5℃と微熱を認む。視力右0.06，左0.04で，視野に求心性狭窄あり。眼底にて両側視神経萎縮あり，うつ血乳頭なし。髄液，頭部X-p，脳シンチ，脳波，脳血管撮影，気脳写，視束管撮影にて異常所見なし。下垂体後葉機能では，GH，F S H，L H，T S Hの軽度の予備能低下あるも，ACTHの予備能はほぼ正常。後葉機能では，水制限試験によるFree water clearanceは正值，Pitressin試験で尿量減少，尿比重，浸透圧の上昇を認めた。

以上より，本症例は，視神経交叉から視床上核付近に異所性松果体腫瘍があつて，尿崩症及び多彩な視床下部症状を呈したと考えられた。毛髪皮膚の脱色は，同腫瘍より産生されるMelatoninによることが推定された。治療として，Chlorpromazine，Hydrochlorothiazide，Carbamazepineの経口剤を試みたが，全く効果を認めず，効果あるPitressinにもアレルギー反応あり，現在下垂体視床下部に⁶⁰Coを照射し，経過観察中である。

23. 角結膜シスチン症の成人例

(眼科) ○龜山 和子・内田 幸男

羞明を主訴とした32才の男性の，角膜実質中に金属粉をまいたような点状，針状の光輝性の沈着物を認めた。これは角膜全面に均一に分布し，実質の各層に観察された。球結膜，脛結膜にも微細点状の沈着物がみられた。

虹彩，水晶体，眼底は正常。球結膜生検組織の凍結切片をメタノール固定した標本で，上皮組織に結晶が認められた。長時間ホルマリン固定を行なつたものでは結晶は消失する。水溶性でアルコール不溶性であることと結晶の形からシスチンを考えた。結膜生検組織の化学分析の結果，シスチンであることが証明された。またアミノ酸尿を認めたが，特にシスチンの増加はなかつた。小児科領域で知られる全身障害を合併するシスチン症とは異つた，いわゆる良性的シスチン症成人例である。

24. AGS 固型洗剤の皮膚疾患に対する試用経験

(皮膚科)

○萩原 洋子・西島 明子・大塚 末野

皮膚炎，湿疹で治療を受けている患者から，固型洗剤使用の可否を聞かれる事は日常しばしば経験する事であり，刺激性的ない，安心して使用できる洗剤に対する期待は大きい。従来の石ケンには，一般にアルカリ性で，しかも香料等の各種のアレルゲンを含んでいる。これらの石ケンを用いた皮膚疾患病巣部に使用した場合，刺激に対して敏感になつていゝ皮膚は，アルカリ性になり，香料は一次刺激，或はアレルゲンとなり得るものであつて，特に皮膚炎，湿疹等の場合，従来の固型石ケンの使用で皮膚が増悪するのを経験している。今回，味の素株式会社が開発した，L-グルタミン酸から誘導された界面活性剤，N-アシル-L-グルタミン酸ナトリウム (AGS) は高級アルコール (セタノール) を添加剤として成型加工したもので，香料を含有せず，その水溶液のpH 5.5～6.2は，人の表皮のpH 4.5～6.5にはほぼ一致したものである。また，適当な洗浄によつて，過度の脱脂はなく，皮膚粘膜に対する刺激作用も殆ど見られず，皮膚炎，湿疹等の病巣部に安心して使用できるものである。私共は，東京女子医大病院皮膚科外来を受診した中から選択した症例55例について，AGS石ケンの試用経験を待たので報告し，併せて正常人で且つ健康皮膚と思われる30例についてもその試用経験を報告した。

25. 点眼薬使用後発症した Toxic epidermal necrolysis 死亡例

(第二病院皮膚科) 青木 良枝・○平野 京子
河瀬 章子・島田 優子

症例；23才女。既往にピリン疹，ペニシリン疹あり。初診；昭和48年5月30日。初診日の前夜10時頃，結膜炎のため，投与されたサルファジン加點眼薬を点眼した。直後に眼部疼痛あり，しばし開眼不能であつたという。約2時間後より，眼瞼部に始まり顔面に及ぶ浮腫性紅斑が出現。初診時，顔面・上肢の皮疹に比しては全身重篤